第一節　アフリカに刻まれた人類の第一歩

一　人類の誕生

私たち人間は、学名をホモ・サピエンス（新人）といい、近年のＤＮＡの分析によれば、直接の祖先はおよそ二〇万年前のアフリカで生まれたものらしい。もちろん新人は突然に生まれたわけではない。人類の歴史の中で、いわゆる旧人、原人、猿人とその進化の歴史をさかのぼることができる。最古の猿人は、類人猿の一種から進化したものと考えられるが、その分岐はおよそ七〇〇万～六〇〇万年前といわれている。

二〇万年、七〇〇万年という時間は、私たちの生活感覚とはかけ離れており、長いとも思えるし短いとも思える。ひるがえってみると私たちが存在する宇宙は、一三八億年前に誕生したという。やがて素粒子が生まれ、元素が生成される。恒星が生まれ、太陽系が形成されたのが五〇億年前、地球が生まれたのが四六億年前である。気が遠くなるような長い時間をかけて、数限りない偶然と奇跡を経て私たちの住む地球は生まれたのだろう。

そして、現在の地球に存在するすべての物質は九二種類の元素によって作られており、その元素は電子やクォークなどの素粒子によって構成されている。もちろん人間も同じだ。そう考えてみると、私たちの起源は一三六億年前にまでさかのぼるとも考えることができる。そう思うと、たかだか二〇万年の私たち人間の歴史など、取るに足らないものとも思えなくはない。しかし物事は必ずマクロ（大局的な）視点とミクロ（微視的な）視点が合わさって、正しい理解ができる。物質を究極の素粒子まで追いかけていくことで、宇宙の始まりが見えてくる

のがその好例である。

話を地球と人間の関係に戻そう。原始生物が誕生したのが四〇億年前。そこからまた数限りない僥倖（ぎょうこう）と奇跡が積み重なって、数多くの生物とそれの基盤となる無機物質の組み合わせによる、現在の美しい地球ができた。地球のあらゆるものや現象を、多くの学問分野が探究して明らかにしてきたことを総合化して、私たちの地球に対する大局的認識ができてきた。人間はその地球の無限大に近い要素の一つであり、その歴史は生物誕生以降の時間の〇・〇〇五パーセントにすぎない。その人間が今や、地球を支配したかのように勘違いするほど増殖し、文明という人間のための世界を作り出している。未来をも単一の生物種が左右しかねないことを私たちは自覚して、人間のことをもっともっと研究していく必要がある。その一分野が歴史学である。歴史は人間、特に人間社会がどのような性質を持ち、それがどのように現れるかを教えてくれる。それを知ることで、いま私たちが生きる社会を初めて知ることができるのである。

人間の歴史をひもとくために、まずはその前史を概観することから始めたい。舞台はアフリカである。

人類の誕生

「人間の祖先はサルである」。私たちはしばしばこうした言葉を聞く。ニホンザルが前足を使って器用に食べ物を食べたり、時に思惟にふけるような姿（実際は何をしているのか分からないが）を見ると、なるほどと思ったりもする。しかしこの言い方は、大局的にみれば間違ってはいないが、誤解を招きやすい表現である。人類は、チンパンジーのような類人猿と共通の祖先から分岐して生まれたのであり、現生のサルから進化したわけではない。

ところで人類と類人猿はどこで分けることができるのだろうか。端的に言ってしまえば、移動の常態を直立二